



TITLE:

『孝連人物考 和合編』--美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動

AUTHOR(S):

ファンステンパール, ニールス

CITATION:

ファンステンパール, ニールス. 『孝連人物考 和合編』--美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動. 教育史フォーラム 2018, 13: 53-71

ISSUE DATE:

2018-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235480>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています。; 許諾条件により本文は2020年6月1日に公開します。

【資料紹介】

『孝連人物考 和合編』
—美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動—ファンステーンパール ニールス
(京都大学)

本稿では、河瀬友山著『孝連人物考 和合編』（1837年序）という詩歌集とその出版状況を紹介・分析し、全冊翻刻することを通じて、以下の三点を図る。第一に、資料調査で新たに発見した、本書の異版の内容を公表することで、近世美濃国研究の基礎情報を提供する。第二に、友山が美濃在住中に運営していた「孝連」という組織の実態を明らかにする。第三に、『孝連人物考 和合編』増加版の出版意図を検討する。仮説として、その増加版とは、友山が水火天神の神職に就任することが決まってから、美濃在住中における活動の集大成として自分の「孝名」を後世に残そうとしたものであったと論じる。

はじめに

近世後期に活動した社会教育者の中に、河瀬友山（1791 - 1857）という人物がいた。美濃国大野郡寺内村の河瀬東三郎の長男として生まれ、天保十二年（1841）正月に、錦小路頼易の猶子として迎えられた後、同年三月、京都の水火天神こと水火天満宮の神職に就任した、という履歴を持つ友山は、「孝」道徳を軸に、講釈と出版活動に勤しんだ¹。現存する版本の量から考えて、当時はその名はある程度知られていたはずだが、現在、友山を体系的に検討する先行研究はなく、彼への言及も常に短い紹介で終わっている。

さらに、その僅かな先行研究においては、一つの誤解が繰り返されている。それは友山の活動の全てが水火天神を拠点にしたということである²。確かに、彼の著作の大半は水火天神の神職に就任してから発行されたが、それ以前にも、友山は美濃在住中に講釈・出版活動を開始し、水火天神と関係ないところで、社会教育者として成功を収めていた。

本稿は、『孝連人物考 和合編』（天保八、1837年序。後『孝連人物考』と略す）の分析を通して、友山が水火天神に就任する前の活動を明らかにする。

1. 『孝連人物考』の紹介 — 二つの問題提起

『孝連人物考』というのは、河瀬友山が編纂した、おおむね美濃国出身の詠み手による詩歌集である。詩歌集は近世を通して多種多様に編纂されていたが、『孝連人物考』には特徴がある。

教育史フォーラム 第 13 号

というのは、題名に「孝連」が冠していること、読み手の氏名や住居と合わせて、その「孝名」が記されていること、詩歌は全て何らかの形で「孝」徳目に触れていること（【図 I】）³、という全書に一貫した「孝」への強い執着がある。

図 I 『孝連人物考』の詩歌

<p>大哉孝學天下大道 萬代不朽師ナリ</p> <p>孝名 濃佐賀人 小森 壽平</p> <p>孝名 濃佐賀人 守永 千代</p> <p>孝名 濃佐賀人 遠山 新衛門</p> <p>孝名 濃佐賀人 三龜</p>	<p>孝身行ヲ謂入道 人の孝ハいふまでもありと わが孝ハ</p> <p>孝名 濃十四條能人 吉田 友十郎</p> <p>孝名 同千四人 下條 啓作</p> <p>孝名 濃佐賀人 羽根田 萬藏</p> <p>孝名 友勝</p>
---	--

これは何を背景に、何を意図して生まれた作品であるのか、先行研究からの手がかりはない。編者友山に関する研究が皆無であると同時に、本書も顧みられることがなかったのである。複製版ましてや翻刻もない。あるのは、『孝連人物考』を「美濃国の孝連百二十人を録せり」や、「美濃国の孝行なるもの一二〇を記している」⁵、「百二十人の孝名の上に道歌や狂歌を載せた」ものとする短い紹介文のみである⁶。しかし、実は、以下で詳述するように、『孝連人物考』の内容はそれほど安易なものではない。

① 孝連の意味

「孝連」という語は何を意味するのか。先行研究にそれを「孝行なるもの」と解釈したものがあるが、これは誤解である。確かに、本書の【序 I】（序と跋については第 3 節を参考）にも、親孝行は「諸道の要、善行の根元」として唱えられ、また「一人の孝子有時ハ、其一国自ら豊なり」というように、「孝」という道徳と、「孝子」という存在への敬意を示しているが、詩歌の読み手が「孝行なるもの」である根拠はない。

筆者は、「孝連」は「講の連中」を意味する「講連」のもじりであると考え。その根拠は、

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

内容と形態ともにある。第一に、詳細は後述（第2節3項）するが、【跋Ⅱ】に書かれている内容は、まさに「講」という仕組みと一致しているものである。第二に、河瀬友山の著作の一つの特徴として、「孝」を同音の字と入れ替えてもじることがある⁷。たとえば、【序Ⅰ】に現れる「孝明」「余孝」「孝感」「孝名」は、それぞれ「光明」「余光」「好感」「高名」をもじっていると考えられる。また、「入孝」「孝釈」「孝席」のように、「講」をもじる語が多いため、「孝連」もまた「講連」のもじりであると考えられるのである。

② 異版の存在

『孝連人物考』に掲載されている読み手の数について、先行研究はそれを120人と述べるが、これは補足を要する。というのは、読み手を120人しか収めていない版本は確かに存在するとはいえ、筆者が今回、所蔵先が知られている全ての版本を調査した結果（【表Ⅰ】）、156人所収の異版も存在していることが明らかになった。

表Ⅰ『孝連人物考』版本一覧

	所蔵先	請求番号	詩歌数	序Ⅰ	序Ⅱ	跋Ⅰ	跋Ⅱ
A	私		120	有	有	有	有
B	水火天満宮		120	有	有	有	有
C	水火天満宮		120	有	有	有	有
D	大阪市立大学	(森) 281/KAW	156	有	有	有	無
E	岐阜県図書館	281-192	156	有	有	有	無

表Ⅰのとおり、【A、B、C】と【D、E】という二系統の版本があり、その内容は、所収詩歌数と、【跋Ⅱ】の有無という二点において異なっている。その他の異同は一つもなく、同じ板木が使われたと考える。

この二系統の出版順について、【D、E】系統が後版、すなわち増加版であるとする根拠は二つある。第一に、異同の詩歌分（36首）は、本書にばらばら挿入されているのではなく、6版本に6首ごとにまとめられた形で掲載されていること。新たな読み手の登場により、その詩歌が新たな版本で同時に追加されたことは容易に想像できるが、逆に削除する必要が生じたという事情は考えにくい。第二、【A、B、C】になく【D、E】にある詩歌分が、本書本文の冒頭と末尾、すなわち詩歌格付けとしての高い位置に配置されていること。わざわざ新しく追加された詩歌であるとするならば、それをやはり高位に位置づけたという理解が自然である。

以上、『孝連人物考』の内容を紹介したなかで、二つの課題が浮上してきた。第一に、「孝連」がすなわち「講連」であったならば、その組織の実態とはいかなるものであったのか。第二に、『孝連人物考』の増加版は、どの時点、何のために出されたのか。本稿は、この二つの問いを順に検討する。

2. 『孝連人物考』の分析 ― 「孝連」という組織の正体

① 孝連の発端

孝連の発端は、【序Ⅰ】によれば、養老の瀧の伝説と関わる。周知のとおり、この伝説の設定は奈良時代的美濃国であり、酒好きな老父を養いたい息子の親孝行の志が天に通じ、瀧の水が酒になり変わった話である。『孝連人物考』によると、この息子は土師友人という人物であり、天皇は、感動のあまりに彼を美濃守に任じた上、年号を養老に改めた。つまり、717 年のことである。それをきっかけに、友人は孝釈道を始め、「国々を巡廻し、孝連を建て、孝道を進め」たという⁸。友人が属する河瀬家はその子孫にあたる⁹。

以上の由緒を鵜呑みすることはもちろん危うい。というのも、いわゆる「養老伝説」自体が、歴史的に変容したものであるからである。もとより、初出と思われる『続日本紀』（巻七、元正天皇）では、孝子も酒も登場せず、養老の瀧は単に「美泉」で、その水に老病を治す効果があるとされた。孝子と酒という要素が伝説に加わったのは、中国の孝思想の影響のもとで、鎌倉中期に編纂された『十訓抄』と『古今著聞集』においてであった。この伝説の変容は、近世においても意識され、『大日本史』でも指摘されている¹⁰。しかし、近世の庶民が「養老伝説」について知ったのは、『続日本紀』『大日本史』経由よりも、『十訓抄』と『古今著聞集』や、それを踏まえる『本朝孝子伝』を通してであったと考えられるため、孝連の由緒もさほど違和感なく受け入れられたであろう。

② 孝連の活動

孝連の活動について触れるものとして、『孝連人物考』の【跋Ⅱ】がある。孝連に属するには、二日または三日ごとに（つまり、2 日、5 日、7 日、10 日、12 日、云々）一銭の「掛銭」を払うことが条件であった。

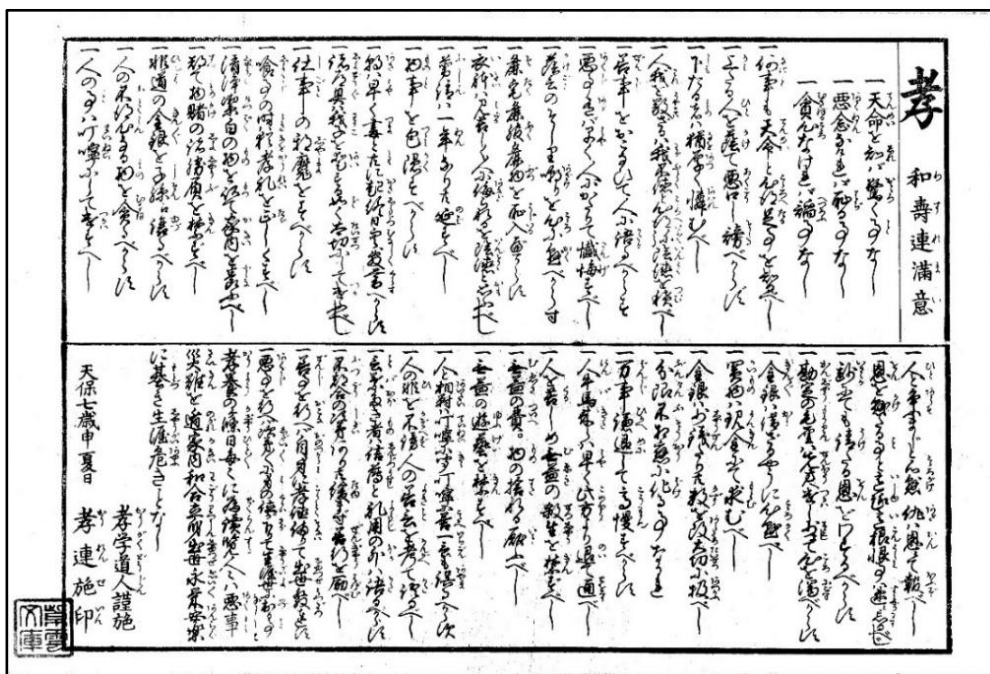
その納金が使われた用途は、次の三つが挙げられる。第一に、代参経費である。孝連が企画したのは、二月の「放生会」（詳細不明）と、八月の「京都孝官聖廟」（詳細不明）への代参であった。くじ引きによって各目的地に講員二人が選ばれ、路用銭を持たせた上で行かせた。第二に、祈祷経費である。【跋Ⅰ】にあるように、河瀬友山は願主として、孝連の講員に代わって、毎日、「孝明神の孝宮」を祭るため祈祷と供え物を行った。第三に、施印経費である。施印とは、無料配布印刷物のことであり、代参の際などに人々に配られた。【跋Ⅱ】に言及される「孝の御札」と「孝養ケ条」との施印に関しては、前者は現物が確認できていないが、その複製と思われるものは『孝連人物考』の巻末に刷られている（【図Ⅱ】）¹¹。後者は二種類が流布されていたようである（【図Ⅲ】【図Ⅳ】）¹²。

図Ⅱ 「孝の御札」

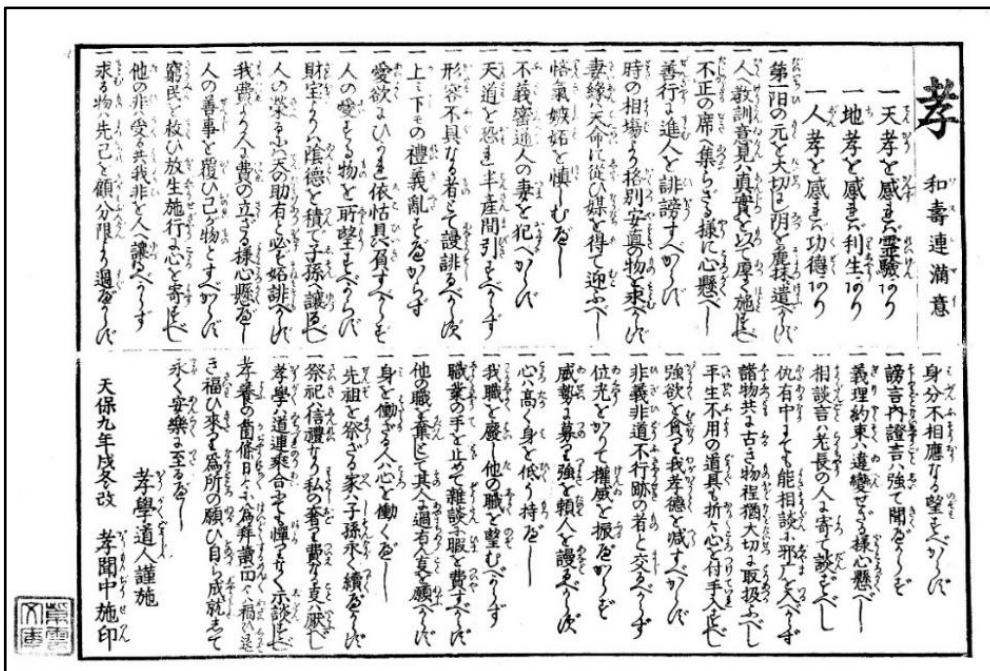


ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

図Ⅲ 「孝連々条」(a)



図IV 「孝連ヶ条」(b)



教育史フォーラム 第 13 号

③ 孝連の詩歌

『孝連人物考』を詩歌集として紹介したが、厳密に言えば、所収されているのは詩歌のみではなく、僅かながら作文もある。全 156 作品の内訳は、和歌 (116 首)、漢文の題に読んだ俳句 (10 首)、和文 (12 文)、原漢文 (12 文)、書き下し文体漢文 (6 文) である。形態の差とはいえ、その内容はなんらかの形で「孝」道徳を賛美している点において共通している。しかし、【序Ⅱ】にあるように、『孝連人物考』は河瀬友山が唱えている「孝学に心を寄て言散したる言の葉」を集めたものなので、詩歌の対象は、「孝」自体よりも、「孝学」もしくは、それを通して理解されている「孝」である。「今までハ懦弱に保し、我身をも新に清む孝学の席」(57) や、「慕ひ行、道の言のは文わけて教にちかき孝学の席」(94)、「垢付し賤が心を汲わけて入孝連に身を清むらん」(62)、「孝連に入てうれしき意より天地の父母に身を任してハ」(75) などの和歌は、その「孝学」へのこだわりをはっきりと反映している¹³。

さらに言えば、「孝座参会の席へハ早集り、必ずしも人を待しむべからず」(102) のように、孝連の講約のようなものを述べているものもある。また、『孝連人物考』の作文は、先に触れた「孝養ケ条」施印に通じる箇所が多いことも目に着く。「生涯の孝徳を失する事、密夫奸通に不過。強而可畏ハ此一条なり」(55) が、「不義密通人の妻を犯すべからず」と似ており、「孝学を誹謗者ハ、天道神仏の冥罰を蒙る。不孝ハ目前天下の罪人なり」(56) は、「善行に進人を誹謗すべからず」と似ており、「孝の行に至らんとならば、先常に清浄の物を喰、神棚・仏壇を奇麗にして信心すべし」(68) は「清浄潔白の物を以て家内を養ふべし」と似ている。

以上、詩歌に現れる「孝学」へのこだわりと、「孝養ケ条」との重複を考えると、『孝連人物考』に作品を寄せた人は、題名のとおり、孝連に属し、友山の孝談を聞き、その出版物を読んだ人であったことは間違いないようである。

④ 孝連の構成

『孝連人物考』に掲載されている読み手を孝連の講員と考えて差し支えないことを確認したが、その講員の構成とはどのようなものであったのであろう。まず男女構成として、全 159 人中、女性は僅か 9 人であった¹⁴。その中で、7 人は『孝連人物考』に所収されている男性の妻もしくは娘であり、2 人だけがそういった関係性がなく、独立した形で記されている¹⁵。

同じく、地域構成も極めて偏っている。全 156 人中、美濃出身の者が 149 人と圧倒的に多く、他には、京都 3 人、伊勢 2 人、江戸 1 人、近江 1 人という割合である。美濃国内に限って言えば、表れている住居総数は 68 所であり、一見広い領布に見えるが、内 55 所については、それぞれ一人か二人の出身者しかいない。残り 13 所が、総人数の過半である 77 人の出身地であることを考えると¹⁶、講員の地域領布はわりと集中的であるといえる。

講員の社会的な立ち位置についての記述はないが、皆が和歌、場合によっては漢文・漢詩を嗜んでいる以上、ある程度の教養を身に着けた人たちだと推測できる。だが一方、河瀬友山が二年前に執筆し、美濃国の「芸能道術に秀達」した人物 200 人を収めた『三野人物考 和合編』(1835 年序) と『孝連人物考』所収の人物との重複が僅か一人しかないという事実を考えると

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

17、孝連講員は下流に属しないにしても、決して上流文芸エリート層でもなかったようである。中間層がメインであったという結論になるが、この層の金銭的・社会的な立場が景気の変化にもっとも左右されやすいことを考えると、彼らが儉約・勤勉を重視する「孝」観念を通して、自分たちの生活の安定を図ろうとしたのも納得がいく。

⑤ 孝連の順序

最後に、本書の内容構成についての重大な特徴を指摘せざるを得ない。それが本書のどの版本でも、その丁順が不定であることである。筆者が【A】と【D】を底本に各丁に番号を施し、順番異同状況を【表Ⅱ】としてまとめた。また、増加版において新に追加された丁をグレーに網掛けした。

表II 「孝連人物考」丁順一覽

A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20								
B	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10								
C	16	17	3	7	6	10	11	18	8	2	5	4	9	20	13	19	14	15	1	12								
D	21	22	23	13	6	4	10	9	20	3	17	16	19	14	15	1	12	7	11	18	5	24	25	26	2	8		
E	26	21	22	23	13	6	4	10	9	20	3	17	16	19	14	15	1	12	7	11	18	8	2	5	24	25		

この丁順異同の意義を考えるには、以下二つの前提を考慮する必要がある。第一に、この異同は製本ミスではなく、意図的に実施されたということ。というのは、『孝連人物考』には、一切の丁数（すなわちページ番号）がつけられていないからである。第二に、その丁順について、【序Ⅱ】では「賢愚・雅俗の趣向を不撰、有の俛に書集て一所ニ連」た、とあるにも関わらず、実はそれが「有の俛」ではないことである。たとえば、【A】と【B】を比べれば、確かに丁順が違うのだが、前半と後半が逆にされているだけである。

これはどういう事か。実は、この不思議な現象は、河瀬友山の前著『三野人物考 和合編』にも見られる。別稿において、その現象の原因を私家版であることに求めた。というのは、私家版は本屋を媒介としない、市販されない出版物であるため、その資金を自分で準備しなければならない。その際、その資金を掲載される人々から募り、投資のお返しとして、彼らには丁順を決める特権が与えられたという仮説であった¹⁸。

『孝連人物考』もまた私家版であるため、以上の仮説もまた通じる。しかし、この場合、出版資金の問題の克服と同時に、もう一つの心理が働いたと考える。講という仕組みには、議員間の対等性という特徴があるため¹⁹、孝連も、【序Ⅱ】のように、「名利・名聞」を否定する必要があった。しかし、それと同時に、「孝」の立場からして、「孝名」を納得いく形で「後世に伝る」機会を各議員に与えなければならなかった。丁数を付けず、丁順を議員に決めてもらうのは、この矛盾を解決するための工夫としても考えられる。

3. 『孝連人物考』の文脈 ― 増加版が出された背景

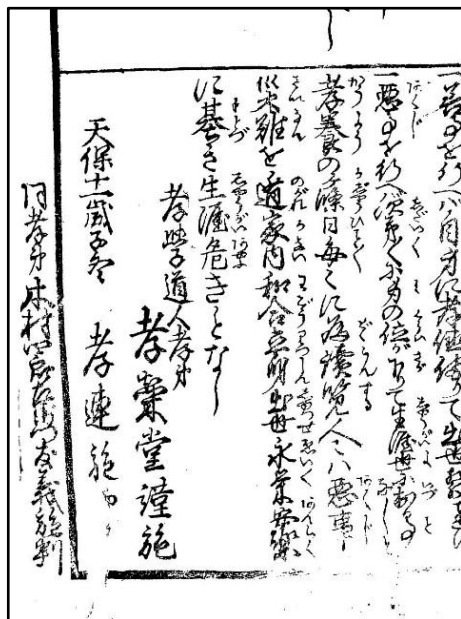
『孝連人物考』の増加版は、いつごろ、何のために出されたのか。まず出版時期からいえば、『孝連人物考』の扉に「濃府 清水堂蔵版」とあるため、これは河瀬友山が濃府すなわち岐阜

教育史フォーラム 第 13 号

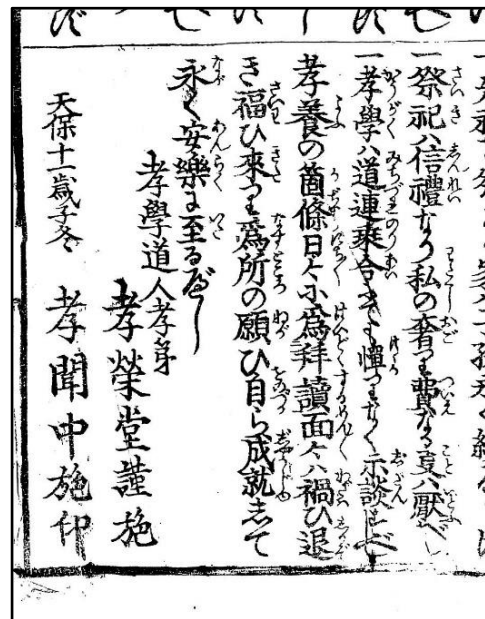
に在住した時期に出されたことになる²⁰。友山が濃府から京都へ移した時期は不明だが、天保十二年三月、水火天神の神職に就任するので、その前であることは確かであろう。もちろん、情報が古くなった扉の版木をそのまま使い続けた可能性を否定できないが、友山が前著『三野人物考 和合編』の改版において示したマメな改刻から考えると、扉の情報は信頼すべきであろう。要は、『孝連人物考』増加版は天保十二年三月以前の刊行となる。

では、増加版を要するほど、天保八年と天保十二年との間の四年間に何があったのか。手がかりを提供するのは、先述した「孝養ケ条」である。この施印二種とも、「孝学道人謹施」とあり、友山を元の施主としているが、それを配布した組織として、前者天保七年版は「孝連」、後者天保九年版は「孝聞中」と記している。この「孝聞中」の詳細は不明だが、後の時代に出された施印から推すと、孝連の姉妹講のようなものであろう²¹。また、天保十一年に再版された「孝養ケ条」二種にもまた興味深い手がかりがある。今回の施主は、「孝学道人」本人ではなく、「孝学道人孝弟 孝栄堂謹施」となっている（【図V】【図VI】）。「孝弟」は「高弟」のもじりであると考えられ、つまり友山の弟子となる。

図V「孝連ケ条」(a) 再版



図VI「孝連ケ条」(b) 再版



友山は、天保八年と天保十二年との間に、姉妹講や、個別に出版活動している弟子を生むほど活躍していた。そうであるならば、孝連の講員もそれなりに増え、『孝連人物考』の増加版が求められることも当然であろう。しかし、講員が増加したとはいえ、彼らは一斉にはなく、徐々に入講したはずである。そのため、増加自体は増加版の刊行を決めた近因であったとは考

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

えにくい。そこで思い返してほしいのは、増加版の異同として、講員の追加のほかにも、【跋Ⅱ】の削除もあったことである。この削除こそが増加版のきっかけであったと考えると、意外と説明がつく。

つまり、友山は天保十二年に水火天神に就くが、この就任は青天の霹靂のような出来事ではなく、それなりの根回しも必要で、前触れがあったはずである。ならば、美濃在住中の友山は、今後、京都に居住を移してから、自分が苦勞して築いてきた、拡大しつつある孝連をどう維持するかについて考えたはずである。活動を完全にやめるか、新たな形で展開させるのか、という選択肢はあったとはいえ、現時の形で活動を続けることは不可能となった。この選択が迫られた時、「孝名」を「後世に伝る」事の大切さを常に唱える友山も、自分の「孝名」を考慮し、存亡の危機に直面した孝連の、現時点の盛んな実態を後世に残そうと増加版に挑んだのではない。その際、孝連の新たな講員を募集する必要もなくなったため、講約の役割を担った【跋Ⅱ】を削除したのではない。

先行研究は、河瀬友山の水火天神への就任をその活動の開始と捉えるが、以上の仮説が正しいければ、それは当時本人にとってむしろ活動終了の可能性さえ帯びた出来事であったと考える。実際、友山の神職就任はその活動の開始でもなく、終了でもなく、転換期となったが、その詳細については別稿に譲ることとする。

3. 『孝連人物考』の翻刻

翻刻凡例

- 一、底本に岐阜県図書館所蔵の版本を使った。
- 一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に改めたが、誤字は直さなかった。
- 一、適宜、句読点や中黒（・）を施したが、濁点は加えなかった。原漢文の訓点は略した。
- 一、詩歌の左に振り仮名がある場合、それを〔 〕内でつけた。
- 一、本文を翻刻の末尾に移動させ、「本文の作品」と「本文の作者」に分けた。
- 一、「序」と「跋」と「本文」という見出しと、本文作品番号と、本文作者の項目は筆者が参考の便のために設けたもので、原文にない。

【序Ⅰ】

孝 菅 相 丞 と 奉 敬 し、ハ、孝明の尊霊、我本朝え出現して、六位の官よりして、
孝行の御徳 自 ら 顕 れ、正敷一位の政官に昇進し、富貴栄花の御身に 備 り給ひしかど、
国土の人民を 憐 ゐ給ひ、勅免を蒙り、御身を筑紫の土師に遷り、万法和合の孝道をひら
け、天拝山におゐて 誓 て 託 宣、我霊を祭り、にうかう じんれつ あます もらす しんじんけんこ
の孝子に育て、即今より来世まで禍罰苦患を遁らしめ、界内界外、平 等 和合永く泰平万穀

教育史フォーラム 第 13 号

成 就 我 孝 明 の 内 に 産 ず る 物 一 と し て 我 孝 精 の 念 力 至 ら ざ る 所 有 べ か ら ず 。 後 世 に 我
神 霊 の 守 護 国 民 家 毎 に 、 信 心 盛 なる に 至 ら ば 、 必 ず 疑 念 有 べ か ら ず 、 ト の 御 誓 ひ 実 哉 。
わ か ひ の も と ま う す を よ ば す と う ど ち く り う そ の か い こ く い た き せ ン し ょ う し や べ つ い は ず か う を ん ほう し や
大 日 本 ハ 申 に 不 及 、 唐 土 ・ 竺 ・ 求 、 其 外 国 に 至 る ま で 、 貴 賤 諸 道 の 差 別 を 不 言 、 為 孝 恩
報 謝 、 家 毎 ニ 遺 漏 な く 、 児 童 の 頃 より し て 孝 営 天 満 自 在 天 神 宮 ト 自 ら 尊 信 し 奉 る
こ と ほん こ う い つ と う し ょ かく し ょ う はん ぶ つ い た い ち じ る き れ い け ン よ か う か う ぐ ら ず い ふ こ と と う と
事 、 万 国 一 統 書 学 書 道 万 物 に 至 る ま て 、 著 靈 驗 の 余 孝 を 不 蒙 ト 謂 事 な し 。 尊 む べ し 。
信 ず べ し 。 実 に 万 国 一 体 和 合 の 聖 廟 な り 。

我 孝 釈 の 開 祖 三 百 余 歳 翁 士 師 の 友 人 ハ 、 孝 行 の 徳 に 依 て 瀧 の 水 泉 酒 ト 変 。 其 孝 感 天 朝
に 達 し 、 御 幸 有 て 孝 感 の 余 り 、 友 人 を し て 美 濃 守 に 任 ら れ 、 猶 孝 官 を 勅 免 有 て 年 号 ま で
養 老 元 年 ト 改 賜 ふ 。 其 勅 孝 を 有 難 ふ し て 孝 釈 道 を 開 て 五 位 の 上 官 に 進 み 、 勅 免 を
蒙 り て 国 々 を 巡 廻 し 、 孝 連 を 建 て 、 孝 道 を 進 め 、 和 合 正 連 の 孝 明 を 伝 え 給 ふ 。 故 に 今 に
至 て 、 た と へ 無 官 た り と も 、 孝 学 道 に 入 、 孝 席 に 進 み 、 孝 釈 を 施 ス 内 ハ 、 五 位 の 上 官 自
ら 備 る と 言 伝 へ る ハ 此 所 以 な り 。

孝学講釈

孝 ハ 諸 道 の 要 、 善 行 の 根 元 た り 。 故 に 不 聞 事 ハ 孝 学 に な ら ず ト 。 可 聞 ハ 孝 釈 、 可 行
ハ 孝 道 、 可 揚 ハ 孝 名 に て 、 親 な き 人 は 猶 更 に 其 孝 名 が 専 一 な り 。 国 に 一 人 の 孝 子 有 時 ハ 、 其
一 国 自 ら 豊 な り と 言 。 人 も 我 も 孝 学 孝 釈 の 孝 席 に 連 り 、 聴 聞 孝 感 する 時 ハ 、 天 道 神 仏
の 本 願 に 叶 ひ 、 悪 事 ・ 災 難 を 遁 れ 、 無 病 延 命 ・ 富 貴 繁 昌 、 即 今 来 世 、 栄 花 安 樂 に 至 る べ
し ト 、 神 託 に よ っ て 濃 府 清 水 堂 の 主 孝 学 道 人 謹 誌

【序Ⅱ】

縁 な き 衆 生 ハ 導 が た し と 勸 る 功 徳 の 人 々 に 縁 を 求 め 、 孝 学 に 心 を 寄 て 言 散 し た る 言 の
葉 ハ 、 賢 愚 雅 俗 の 趣 向 を 不 撰 、 有 の 俚 に 書 集 て 一 所 ニ 連 、 人 物 考 と 題 し て 、 後 世 に 伝 る
事 、 先 祖 ・ 子 孫 え の 孝 養 に し て 、 人 々 の 名 利 ・ 名 聞 に あ ら ず 。 見 に 感 じ 、 聞 に 移 り 、 自 善 と 連
る 孝 門 の 橋 掛 り と 寿 留 事 志 加 里 。

天保八歳丁酉初夏中日

清水堂

川瀬友山謹述

【跋Ⅰ】

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

孝ハ万法の要、孝学ハ諸道を引立てる万法、和合の大道なり。諸法の和合こそ、天地の父母
え孝養に叶ひ、三光明に万物和合して、自泰平を致す者なり。況於国民乎。家内
和合して災難消滅、富貴繁盛、身体和合すれば、無病延命・信心成就して、後世ハ安楽
国土を極め、子孫永栄、人々の孝名を伝へ、天下泰平・万穀成就、為国家孝行、酉年の春
より、清水堂の主孝学道人、孝学古例の孝連を建、入孝子の面々、天地神仏・先祖子孫へ為
孝養、孝連人々名前一々孝明神の孝宮に奉勸納、常灯明を捧げ、日々に新にして、御
膳を伝へ、御鏡餅、御菓子、孝製養老子等、奉備之。天下泰平 豊年豊作 孝連人々
名前一々 災難消滅 職業繁昌 家内安全 無病延命 夫婦和合 信心成就 子孫
永栄。孝養感通の御祈禱、日々日毎に勤行、懈怠なく誓願の功德を積も、孝徳の御流に浴
し、御治世の恩沢を蒙り、冥加を思ふ人々ハ、尠報志にも足ぬべき哉と進むる功德供々に
入孝連の篤達平等に希而已。

【跋II】

孝の御札並孝養ケ条の略書施しに出し、八月放生会、二月京都孝官聖廟えの代参ハ二
人ヅ、孝連の内より落籤ニて相勤、路用钱ハ兩人え四貫文相渡なり。
御掛銭ハ常灯明・御備物料・施紙料・放生会・御祈禱料、惣代兼而二日目三日目に一銭
ヅ、なり。掛る所ハ尠一文ヅ、二日目三日目なれ共、孝連の人々え備る所の感通の供物
ハ日々永々無懈怠、御祈禱の勤行有之事、誠ニ少銭積りて大善となり。陰の祈りが陽
の利生。孝連え入孝の人々ハ、生涯不飢不寒、身の危きを不知、即今・来世の苦患を遁れ、
後代世々に生を得る共、願力・孝精の至らざる所なく、信心堅固の安楽に住する事、孝
太無量の功德ハ後世子孫えも相継べし。
家内のべり、和合の種、我と我身に備る孝徳銭ハ別掛に不成様、孝官の孝連に入し功德
を思ひ、家内万事に心懸、俟約を専らにして無益の費の立ぬ様、常々心懸る時ハ其功德
年内積りて孝大なり。其孝大の積り銭の内にて、二日目と三日目に一文ツハの御掛銭が半季
積ても七十二文也。

濃府清水堂孝学道人願主友山

【本文 作品】

1. 孝者万物雖多其治一也
2. 前だれが 玉簾に乗も 孝行の 徳の積りし 内ぞゆかしき

教育史フォーラム 第 13 号

3. 孝行の 身を^{うつ}写し^ゑ画の 形見^{かたミ}をも 名^{つた}をも伝へん 子々の榮へに
4. 孝者五常之本、教道莫先於孝
5. 孝の世へ 行^きに生^ミし身ハ 功^{こう}を立 名^{おきミ}を後世へ 置^{おき}土産^{やげ}せよ
6. 教民親愛、莫善於孝
7. よしあしハ 心^{こころ}にとひて 迷^{まよ}ひなく 庭^にのおしへの 道^{みち}を行^{ゆく}まし
8. 水^{ミづ}の面^をに むかへ^もうつる 我^わ影^{かげ}を 親^{おや}のかたミと 思^{おも}ふかしこき
9. 孝行^{かう}な 人^{ひと}ハ年^{とし}徳^{とく} あき^{ほう}の方 四方^{よろ}八方 万^{よろづ}よしなり
10. 孝学^{かうがく}を 聞^きに北野^{きたの}の ほとゝぎす 一^{ひと}声^{こゑ}なりと 家^{いへ}土産^とにせん
11. 忠^{いん}ハ内^{うち} 孝^よ外^ふなり 中心^{しんじん}に 思^{つと}ふのか忠^{むね} 行^いハ孝
12. 夫^{つま}といふ 文^{もん}字^じを 戴^{いた}く かんざしハ 一^{いつ}本^{ほん}さすが 孝^{こう}貞^{てい}の道^{みち}
13. 巡^{めぐ}りめくる 道^{みち}ハ孝^{こう}そと 行^いハん 身^みに余^ありぬる 親^{おや}の恩^{おん}かも
14. 堀^{ほり}出^いす 黄^{こが}金^ねの釜^{かま}と 白^{しろ}雪^{ゆき}の 中^なから竹^{たけ}の 孝^{こう}行^{ぎやう}の徳^{とく}
15. 孝^{こう}の道^{みち} 行^いハ 行^{ぎやう}なり 行^いひの 行^いを常^{まこと}と 行^いるが行^{かう}
16. 孝者諸行之源 涼^{すず}しさハ さまなから 夏^{なつ}の月
17. 道^{みち}おほき 道^{みち}の内^{うち}にも 孝^{こう}の道^{みち} この道^{みち}行^いん 道^{みち}枝^え折^{をり}して
18. 孝^{こう}の字^じを 頼^{たの}む心^{こころ}の 一^{ひと}筋^{すぢ}に 万^{よろづ}の神^{かみ}も 守^しりたまハん
19. 昔^{むかし}明^{めい}王^{わう}以^{もつ}孝^{こう}治^ち天下^{てんか}、況^{いは}ん身^み家^け乎
20. 淳^{ちん}朴^{ぱく}ハ至^{いた}孝^{こう}の本^{ほん} 親^{おや}の 風^{ふう}にまかする 柳^{やなぎ}かな
21. 孝^{こう}積^{せき}を 花^{はな}に寄^よ添^{そへ}て 永^{とこ}き日^ひや 聞^きたといわす 八^{はち}重^{じゆう}咄^{だつ}し
22. 身^み体^{たい}不^ふ毀^{かい}傷^{きやう}者^{しや}孝^{こう}之^の始^{はじ}也 雨^{あめ}に風^{ふう}に 身^みを守^しり初^{はつ}ん ことし竹
23. 不^ふ朽^く名^なの 年^{とし}経^{けい}ぬる程^{ほど} 世^よに薫^{かほ}る 孝^{こう}文^{ぶん}木^{ぼく}〔ムメ〕の 榮^{さか}へ尊^{そん}し
24. 天^{てん}地^ち親^{しん}祖^その余^{あま}孝^{こう}ヲ無^む非^ひ業^{ごう} 薫^{かほ}る恩^{おん}の 風^{ふう}や尊^{そん}し 身^みに幾^{いく}世^{せい}
25. 親^{おや}々^々の 形^{かた}見^ミを己^をが 物^{もの}にして 氣^き促^まに孝^{こう}を 行^いへや人
26. 神^{しん}体^{たい}を 尋^{たづ}ね 見^みれば 孝^{こう}行^{ぎやう}の 心^{こころ}ぞ靈^{かみ}の 驗^{しるし}なりけり
27. 親^{おや}の威^いを 借^{かり}て振^ふ出^だす 大^{おほ}鳥^{とり}毛^も 奴^{やつ}等^{たら}扱^{さて}も 孝^{こう}も有^あかい
28. 植^{うへ}置^をし 人^{ひと}の 齡^よも 色^{いろ}かへず 心^{こころ}ハ孝^{こう}に 住^すよしの松^{しょう}
29. 強^{しい}らねバ 喰^くへん天^{てん}屋^やの 孝^{こう}の餅^{もち} 進^{すす}める人^{ひと}も 供^{とも}々に喰^くへ
30. 孝^{こう}立^た身^みノ生^{せい}陽^{やう}ヨリ、界^{かい}内^{ない}界^{かい}外^{がい}、皆^{みな}是^こ孝^{こう}ニ非^ひスト云^いコト無^なシ
31. 家^{かない}内^{ない}にて 日^ひハ夫^をつと 月^{つき}ハ妻^{つま}なり 六^むツまじいのが 孝^{こう}明^{めい}と知^しれ
32. 自^じ他^た共^{とも}に 孝^{こう}心^{しん}を 破^{やぶ}ざる様^{よう} 戯^{たは}れる言^{こと}の葉^はを 散^{ちら}すべからず
33. 月^{まち}待^{だい}や 日^ひま^{だい}代^{だい}待^{だい} 孝^{こう}信^{しん}を 待^{まち}人^{ひと}々に 靈^{れい}驗^{げん}ぞある
34. 行^{ぎやう}徳^{とく}有^あバ高^{かう}位^いノ孝^{こう}前^{ぜん}ニ不^ふ可^か恥^ぢ 地^ちに住^すど 雲^う井^ゐも畏^{おそ}ず 揚^{あげ}ひばり

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

35. 覚^{さまさ}ばや 目^めを孝行と 明^{あけがらす}鳥^{しとね} 褥^をハ重^{うづ}き 親^{うづ}の移^{うつ}り香
36. 有^あがたや 天地^{てんち}の父母^{ふぼ}に 抱^{いだ}かれて 日々^{ひび}の意見^{いけん}を 明^あくれに知^しれ
37. 雨^{あめ}満^{みつ}る 神^{かみ}も仏^{ぶつ}も 聖^{せい}人も 孝行^{こうぎやう}にこそ 身^みを尽^{つく}しけり
38. み^みの佐^さ賀^がに 住^{すむ}よしあしも 旧^{ふる}里^{さと}の 親^{おや}へ孝^{こう}ぞと 慕^ほふ^{はまを}浜^ぎ获^と
39. 成^{なり}ば来^こい 行^をふ孝^{こう}の 強^{つよ}きにハ 不^ふの字^じを脱^だで 降^{かう}参^{さん}やせん
40. 孝^{こう}者^{しや}至^し徳^{とく}要^{よう}道^{どう}也^や、人^{にん}之^の行^{ぎやう}無^な大^{だい}於^お孝^{こう}
41. 諸^{もろ}の 願^{ねが}ひを 庚^{かのへ} 申^{さる}の夜^{あつま}に 集^{あつ}まる人^{ひと}の 孝^{こう}心^{しん}をまつ
42. 無^ぶ事^じな顔^{かお} 見^みつ見^みられつ^つの 宿^{やど}下^{さが}り 奉^{ほう}孝^{かう}ばなし 家^{いへ}産^{ぶと}にせん
43. 神^{しん}ハ心^{しん}ナリ信^{しん}心^{しん}ナリ 信^{しん}ニ中^{ちゆう}心^{しん}ノ 勤^{つとめ}ヲ謂^い忠^{しん} 心^{しん}ノ信^{しん}ヲ身^{しん}ニ 行^{ぎやう}ヲ謂^い孝^{こう}
44. 妙^{きやう}法^{ぽう}ハ 忠^{しん}孝^{こう}二^に行^{ぎやう}の 勤^{つとめ}にて 蓮^{れん}花^がハ心^{しん} 経^{きやう}ハ孝^{こう}文^{ぶん}なり
45. 身^み心^{しん}勤^{きん}行^{ぎやう}、忠^{しん}ハ 忠^{しん}ニ而^な陰^{いん}ナリ、孝^{こう}ハ行^{ぎやう}ヒニ而^な陽^{やう}ナリ
46. 不^ふ忠^{しん}ナレバ親^{おや}の心^{しん}不^ふ安^{あん}。親^{おや}ノ心^{しん}安^{あん}ズルヲ孝^{こう}ノ行^{ぎやう}ヒトス。故^{ゆゑ}ニ一^{いち}ツ孝^{こう}立^たテハ、忠^{しん}其^{その}忠^{しん}ニ在^ある。
47. 天^{あめ}地^{つち}の 親^{おや}へ報^{ほう}恩^{おん} わすれずバ 忠^{しん}孝^{こう}もたち 子^こ孫^{そん}栄^{えい}久^{きう}
48. 南^{なん}無^むハ孝^{こう} 阿^あ弥^み陀^たハ行^{ぎやう}ぞ 仏^{ぶつ}々^々ハ 信^{まこと}の人の こゝろなりけり
49. 天^{あめ}満^{みつる} 宮^{みや}坐^あかしこき 孝^{こう}学^{がく}の 伝^{つた}へバ代^よ々に 不^{つき}朽^ぬ梅^めが香^か
50. 己^をが身^みに かむる不^ふの字^じを 卸^{ぬき}捨て 今日^{けふ}行^をひの 孝^{こう}門^{もん}に在^ある
51. 孝^しト知^がらバ 我^が意^いや不^ふの字^じを 去^さよかし 親^{おや}や夫^{そと}に 任^{まか}す身^みなれば
52. 神^{しん}の本^{ほん}体^{たい}ハ心^{しん}なり 心^{しん}に有^ある物^{もの}ハ信^{しん}なり 信^{しん}の発^{はつ}する所^{ところ}ハ身^{しん}也^や 身^みに行^{ぎやう}ふハ孝^{こう}也^や
53. 行^{かう}徳^{とく}を あふげバ空^{そら}に 孝^{こう}明^{めい}の 内^{うち}に羽^うをのす 鶴^{つる}の一^{いち}ト連^{れん}
54. 可^か愛^{あい}さの 余^{あま}重^{おも}荷^にハ 親^{おや}の恩^{おん} 小^こ付^{つけ}ハ下^をせ 孝^た行^{ぎやう}の旅^{たび}
55. 生^{しやう}涯^{やう}の孝^{こう}徳^{とく}を失^しする事^{こと}、密^{みつ}夫^ふ奸^{かん}通^{つう}に不^{しか}過^く。強^{しい}而^て可^を畏^そハ此^{この}一^{じやう}条^{じやう}なり
56. 孝^{こう}学^{がく}を誹^そ謗^{しやう}者^{もの}ハ、天^{てん}道^{どう}神^{しん}仏^{ぶつ}の冥^{みやう}罰^{ばつ}を蒙^{かう}る。不^{もく}孝^{ぜん}ハ目^め前^{ぜん}天^{てん}下^かの罪^{つみ}人^{にん}なり
57. 今^{いま}までハ 情^だ弱^{じやく}に保^{もち}し 我^{われ}身^みをも 新^{あらた}に清^{きよ}む 孝^{こう}学^{がく}の席^{せき}
58. 孝^{こう}天^{てん}に 満^{みつ}る匂^{にお}ひを 慕^{した}ひ寄^よ 人^{にん}も自^し善^{ぜん}に 濡^{うる}へる梅^{うめ}
59. 孝^{こう}行^{ぎやう}の 道^{みち}は末^ま広^{ひろ}の 要^あ石^{いし} かしまの神^{かみ}も 人^{にん}の身^みのうへ
60. 行^{かう}人^{にん}の 頭^{あたま}ケ原^{はら}え 天^{あま}くだり まし 在^あます神^{かみ}の 孝^{こう}の元^{もと}結^{ゆひ}
61. 真^ま直^{ちゆう}に 天^{てん}までとゞけ 孟^{もう}宗^{そう}の 雪^{ゆき}の中^{なかつ}にも 竹^{たけ}の孝^{こう}行^{ぎやう}
62. 垢^{あか}付^{つけ}し 賤^{しづ}が心^{しん}を 汲^くわけて 入^い孝^{こう}連^{れん}に 身^みを清^{きよ}むらん
63. 親^{おや}なくバ 身^みに天^{てん}地^ちや 神^{かみ}仏^{ぶつ}の 道^{みち}を守^{まも}るを 孝^{こう}行^{ぎやう}と謂^いふ
64. 立^たつき 見^みる 親^{おや}の老^{おい}木^きに 子^こを接^ついで 孝^{こう}となる字^じぞ 心^{こころ}して読^{よめ}
65. 聞^きへよく 同^{どう}じ言^{ごん}葉^{えつ}も 和^やらかに 孝^{こう}行^{ぎやう}せよも 叮^{てい}嚙^{がい}に釈^{いへ}

教育史フォーラム 第 13 号

66. 己に勝 孝にハ負て 行へは 天下に敵なし 禍 ひいなし
67. 孝心の 信 八人の 言葉なり 虚言 偽りハ 不行とぞなる
68. 孝の行に至らんとならば、先常に 清 浄 の物を喰、神棚・仏壇を奇麗にして信心すべし
69. 濁りにも 染ぬこゝろハ 孝にして 千草にすめる 露の白玉
70. 大道の 孝ハ行なり 孝行ぞ 孝は大道 大道は行
71. 孝行は 人の 鏡の 天下一 誰 姿身も うつしてぞ知れ
72. 垢づきし 身の皮を脱 竹の孝 行がつもれば 雪の中にも
73. 天地の 親へ孝ぞと 知べして 教にたてる 道わけの文
74. 四方に鳴 神の如くに しらせハや その孝名を 行にとゝめて
75. 孝連に 入てうれしき 意より 天地の父母に 身を任してハ
76. 聖廟孝宦、諸道教主、皆是以孝、開道為本
77. たらちねの かわい鳥の 養育を やしなひ反す 声を聞にも
78. 耳に逆ふ 人も自善や 孝学の たで喰ふ内に 好々となる
79. 常に 務 仁義礼智の 信心ハ 行ふ孝の 中心にぞある
80. 天地の めぐみに咲る 花と世の ミちにまどはぬ 孝の一ト筋
81. 父母在不遠遊
82. たらちねの 恵ミハふかく 降雪に おもひかさぬる 夜半の小衾
83. 仁人信而孝、術朮実而行
84. 天の川 水上清き 孝行の 流れ久しき 七夕の糸
85. あらそハぬ 風に柳の まことをハ 吹ハなびけよ 孝の一字に
86. 孝行の 祖の 源を 汲わけて 名を 橘の 井手の玉川
87. 孝はみの かミと 敬ひ 行へは 心あんどに 張替る法
88. 子としてハ 老をかむりて 戴ける まことをさとす 孝の一ト文字
89. 四方へ名を 流すうつハや 方円の ミづと素直に つかふ孝行
90. たが為に 孝を駿河の 不二の雪 我身につもる 徳の白妙
91. 譲り請し 祖の行徳を 積あげて 孝ト成世を ゆづる子の栄へ
92. 祖の恩を いつ報じなん 白雪の つもる高根も 孝に解行
93. 孝ぞとハ 思ふばかりの 名のミ成と 今川合の 家に残して
94. 慕ひ行 道の言のは 文わけて 教にちかき 孝学の席
95. 一孝立ハ万善従之 一筋の いとや空井の 几布
96. 孝感入行ノ人連ハ現在ノ罪永消滅ト云々

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

97. 孝ハ天下ノ大道也 目^{あて}当^{こみち}より 経^{こみち}によらす さくら狩
98. お孝さん 上^ふの不^{とら}の字を 取^{とら}しやんせ 行^{とら}のお顔が 見たふごさんす
99. 毎朝向水面拜父母影
100. 孝行を かんじ入ます 厚氷 親の重荷も 解かゝる恩
101. 行^{とら}といはゞ 孝ツト胸に 手を置て 思案仕かえて 身の上を知れ
102. 孝座参^さ会^{さんく}の席^{はやく}へハ 早^{はやく}集^{はやく}り、必ずしも人を待しむべからず
103. 行^{をこな}へバ 心^{やす}も安^{あきら}く 章^{あきら}に 内外^{をさま}治^{よう}る 孝^{よう}養^{よう}の門
104. 包^{つむ}とも 頭^{あらハ}れ渡^{わた}る 孝^は行^{むか}の 徳^はに刃^わ向^わふ 禍^{わざはひ}はなし
105. 孝^よの世^{かう}え 行^いに出^いたる 孝^いの身^いが 心^いの孝^いを 行^{をこな}ふが道^{みち}
106. 孝ハ身ニ行ヲ謂人ノ道 人の子ハ ひとてありたし ほとゝきす
107. 鎖^{さび}安^{やす}き こゝろの 釦^{つるぎ} 磨^{とぎ}たてゝ 孝^{ふく}伏^{ふく}をせよ 邪^じ魔^まな不^じの字^じを
108. 知^{しれ}や人^ふ 不^ふハ無^む有^うハ得^うと ばんしやうの 工^{たく}ミに同じ 孝^たの一^たチ行^た
109. 孝にしづミ 不孝にうかむ 川竹の 流^ふす不^ふもあり 拾^{ひろ}ふ富^ふもあり
110. 身ハ低^{ひく}ふして謙^{けん}退^{たい}の庭^にに可^に 恐^{をそ}、心ハ高^{たか}ふして孝^{かう}位^いの孝^{かう}前^{ぜん}ニ不^は可^は恥^は
111. 簪^{かんざし}の形^{かたち}ハ夫^をの字^とを略^をす。故^かニ頭^{かしら}ニ指^さハ一本^さニ限^さるへし。二夫^ふを 戴^{いた}ハ 自^をら孝^を
義^{そむく}ニ背^{そむく}事^{そむく}有^{そむく}と心得^{そむく}べし
112. 不^ふをすてゝ 孝^{をこな}のミにして 行^{をこな}へバ 不^ふハ富^ふに变^{かわ}り 富^{ふう}貴^きとぞなる
113. 孝^{うへ}の身^ふも 上^{うへ}の不^ふの字^ふに まよひけり 下^{した}見^{すぎ}て過^{すぎ}よ 行^{した}ひの道^{すぎ}
114. 迷^{まよひ}ひぬる 心^{まよひ}も孝^{かん}に 感^{かん}じてハ 上^{かん}の不^{かん}の字^{かん}を 取^{かん}んとぞ思^{かん}ふ
115. 孝^{すぐ}行^{すぐ}の 心^{すぐ}が直^{すぐ}に 神^{すぐ}仏^{すぐ} 外^{すぐ}にもとむる 聖^{すぐ}人^{すぐ}もなし
116. 天^{あめ}地^{つち}の 親^{おや}の指^{さし}図^ずの 種^{たね}おろし 諸^{しよ}穀^{こく}陽^{よう}気^きの 孝^{さく}作^{さく}を農^の身^み
117. 子^し農^{のう}孝^{かう} 正^{せい}直^{ちく}にして 行^{をこな}へバ 極^きて楽^{はめ}し 家^{たの}業^{ぎやう}万^{まん}寿^{じう}✓
118. 孝^{かん}行^{かん}を 感^{かん}じて水^{かん}も 酒^{なり}と変^{なり} 老^{なり}を養^{なり}ふ 和^{なり}佐^{なり}美^{なり}濃^{なり}の瀧^{なり}
119. 孝^{よつて}徳^{よつて}ニ依^{よつて}、寿^{よつて}を 保^{よつて} 事^{よつて}、八^{よつて}百^{よつて}有^{よつて}余^{よつて}歳^{よつて}、世^{よつて}ニ八^{よつて}百^{よつて}比^{よつて}丘^{よつて}尼^{よつて}ト謂^{よつて}伝^{よつて}シハ、養^{よつて}老^{よつて}孝^{よつて}子^{よつて}ノ妻^{よつて}女^{よつて}
ナリ
120. 内^{うち}に隠^{かく}るゝ行^{ゆく}徳^{とく}有^あバ、外^{そと}に自^{みづか}ら孝^{かう}名^なあり
121. 孝^{あじ}行^はの 味^{あじ}ひをよく 知^しれよかし 大^{こん}根^{げん}元^{げん}の ぜ^{むか}んに向^{むか}へば
122. 孝^{あけ}名^はに 連^{あけ}なればこそ 孝^{あけ}ゑんに な^{あけ}をも揚^{あけ}羽^はの 子^{てふ}蝶^{てふ}かな
123. 賞^{しょう}罰^{ばつ}ハ一人^{ひとり}を明^{あきら}にして、万^{まん}人^{にん}の孝^{かう}心^{しん}に基^き付^つ様^{よう}に施^せすべし
124. 忠^{ちゅう}孝^{かう}ハ 有^{ある}べきようの 信^{しん}心^{しん}が 至^{いた}る六^{ろく}字^じの 御^ご子^しト成^{なる}かな
125. 孝^{あん}行^{らん}を すれバ我^{われ}身^みも 安^{あん}楽^{らく}に 家^{はん}繁^{はん}昌^{やう}の 本^{ほん}とこそなる
126. 孝^{あた}トいえば ア、ト頭^{あたま}を 楽^{らく}書^{がき}や 壁^{かべ}板^{いた}物^{ぶつ}に 疵^{きず}をつけなよ

教育史フォーラム 第 13 号

127. 先達^{せんたつ}の をしへの道が あれいこそ 行人^{ゆく}多き 孝のつれなれ
128. 孝養の 門^{とびら}の 扉を おし開き 入てぞ受ん おこなひの玉
129. 君に忠 親に孝行 する人ハ 神も守りて 子孫栄ん
130. 父母の 教の道に まかせつゝ すなほに通る 孝の一筋
131. 天が下 孝の一字を 守りなハ 行ふ道に わさハひはなし
132. 以孝学礼、開活花一道、名緑洞三瓶御流、伝孝世也
133. 孝順者高行也 言の葉も 尽せぬ徳や 孝の道
134. 孝と聞ハ つけ子^{きけ}のなくも 親鳥に 似まがふ程の 鶯のこゑ
135. 八百^に尼 三百^{をふ}翁^{ことぶき}の 寿を ミな孝行の 徳にこそあれ
136. 石臼^{いしうす}の 重^{おも}きハ老^{をい}の 子引歌^{こひきうた} 孝と張揚^{はりやげ}て 行に止めよ
137. 我里^{なところ}ハ 名所^{なところ}なれや 瓜^{うり}の花^かの 孝と匂^かひを 国々^{くに}へ咲
138. 孝と聞ハ 我^き一物^いを はなれツゝ 天地^{ちと}まかせを 悟^{さと}るなりけり
139. 孝作^{ひろほこまつ}の 広^{ひろ}矛^ぼ行^まる 人ハミ^くな 金^く秋^へ色^はかえて 楽^{らく}の世^よに住^{すむ}
140. 淀^{よど}むなよ 流れにしつむ 川竹^{うか}の 浮^{うか}むも己^{みづか}が 孝に社^{やしろ}あれ
141. 一身^いに 一孝^いのたつ 行者^{まこと}こそ 信^{まこと}の道に かない安全
142. 乱身無大於姦、治身莫大於孝。
143. 孝の字に 心が付ハ わさハひも 遁^{のが}れて家内 和合するなり
144. 水にせず 孝に人身^{あか}の 風呂の湯に 心の垢^{あか}を あらひ清めん
145. 終^{よもすから}夜^ね 忠^{ねづ}ト不^ミ寐^{こへ}身の 八声^{こへ}から 国家^{こく}孝行^こと 庭^にとりが鳴^{なく}
146. 忠孝の 道を行ひ 勤れば その身も栄へ 子孫繁昌
147. 素直^{すなを}なる 竹^{すゝめ}に 雀^{すずめ}ハ 忠と謂^あく 明^{から}る 鳥^すハ 孝行となく
148. 最上^{さいじやう}の 宝^{たから}といふ 孝明^{めう}の ひかりハ人の 行^いひにあり
149. 宝行^{ほきやう}〔カウコウ引〕 孝^をの 行^こひを以て最上の宝トス、生れ出るより孝を 保^{たもちをこのふ} 行^い〔ホキヤウ〕ト謂
150. 孝明^{めう}の 内^{うま}へ生れて 天地^{あめつち}の 教^をを保^し 行^い〔ホギヤウア〕ふぞ道
151. 大哉孝学ハ天下ノ大道、万代不朽ノ師ナリ
152. 学べよや 孝ハ諸道の 要にて 動かぬ世々の 鏡成けり
153. 寄孝人菊園 孝人^{すく}に 見せばや菊^{すく}の 夕日^{ゆふひ}ばへ
154. 誤^{あやま}りて 心を孝に 新玉^{あやま}の 手^てを拾^{ひろ}ひし 福^ふひの春
155. 孝徳如山高、財宝如海集
156. 主^{ぬし}ハ誰^たと 問^たれて業を 恥^はる身も 心は孝に 澄^{すみ}わたる月

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

【本文 作者】

	姓	名	国	所	孝名	備考
1	鶴飼	重寛	美濃	佛生寺	双白	
2	吉田	歌輔	美濃	芝北方	吉晴	
3	吉田	佐右衛門	美濃	北方	吉政	
4	下坂	柳平	近江	北下坂	源簡	
5	横幕	久左衛門	美濃	芝北方	孝久	
6	吉田	栄輔	美濃	大井	師軌	
7	上嶋	清兵衛		京都	正純	
8	上嶋	清七		京都	正次	息男
9	渡辺	八右衛門	美濃	加野	正綱	
10	北野	源助	美濃	加野	矩為	
11	宇野	幸治郎		京都	直美	
12	大野	峯女	美濃	加野	礼尾	知里妻
13	鶴飼	七良右衛門	美濃	芝北方	重房	
14	宇野	織右衛門	美濃	北方	正房	
15	豊吉	源右衛門	美濃	四日市	高行	
16	山内	彦輔	美濃	芝北方	免隆	
17	江崎	丈右衛門	美濃	北方	直孝	
18	松尾	源輔	美濃	芝北方	安尊	
19	守屋	玄信	美濃	濃府	守義	
20	後藤	善蔵	美濃	芥見	一夢	
21	後藤	泰治	美濃	芥見	吉信	息男
22	辻	久孝	美濃	古橋	雨林	
23	丹羽	正右衛門	美濃	岩田	以久	
24	水野	伊達助	美濃	古橋	里松	
25	足立	太治郎	美濃	小瀬	直信	
26	大西	藤兵衛	美濃	葛原百瀬	長秋	
27	大西	藤左衛門	美濃	葛原百瀬	正吉	息男
28	松田	為蔵	美濃	白金	水清	
29	深尾	菊蔵	美濃	岩村	其楳	
30	中村	儀兵衛	美濃	千匹	利勝	
31	堀口	作右衛門	美濃	上之保	貞央	
32	山口	孫右衛門	美濃	白金	山慶	
33	永田	岩吉	美濃	植野	鉄石	
34	大野	与作	美濃	長良	一松亭	
35	下条	藤兵衛	美濃	千匹	経知	
36	松尾	庄左衛門	美濃	見延	桃二	
37	山田	禎輔	美濃	山田	宗福	
38	駒田	岸女	伊勢	安濃津産	佐賀	
39	後藤	孫三郎	美濃	白金	白鳥	
40	河田	熊碩	美濃	城田寺	守躬	
41	永田	彦作	美濃	上野	友次	
42	永田	竹三郎	美濃	上野	正次	舎弟
43	堀	邦太郎	美濃	大洞	正恭	
44	伏屋	長蔵	美濃	伏屋	清川	
45	岩井	久松	美濃	大洞	重継	
46	堀	利佐衛門	美濃	大洞	方正	
47	亀山	久兵衛	美濃	小屋名	政信	
48	岩井	吉太郎	美濃	大洞	置幾	
49	市川	久右衛門	美濃	河渡駅	久胤	
50	足立	友之丞	美濃	小瀬	兼吉	
51	足立	銀	美濃	長良産	美音	妻女
52	小石	三柳	美濃	跡部	水燕	
53	森	弥門治	美濃	牛敷	重慶	
54	松田	嘉兵衛	美濃	白金	為名	
55	足立	喜平治	美濃	小瀬	義記	

55	足立	喜平治	美濃	小瀬	義記	
56	林	伝右衛門	美濃	十八条	重善	
57	足立	栄三郎	美濃	小瀬	義光	
58	河田	別之進	美濃	城田寺	守妙	
59	足立	林治郎	美濃	小瀬	良英	
60	山田	惣右衛門	美濃	白金	高宗	
61	大野	城三郎	美濃	溝口	野遊	
62	神谷	姓女	美濃	山県	霊尾	
63	長屋	重兵衛	美濃	洞戸松谷	金治	
64	星野	双仁	東都		再善	
65	高井	孝輔	美濃	小倉	一鷹	
66	高橋	由兵衛	美濃	文殊	操	
67	足立	健吾	美濃	小瀬	義武	
68	吉田	勝太郎	美濃	稲口	美年	
69	千草	新七	美濃	濃府	白玉	
70	伏屋	勘兵衛	美濃	伏屋	秀福	
71	中村	市郎兵衛	美濃	千足	慶平	
72	足立	金右衛門	美濃	小瀬	兼次	
73	嶋戸	鐵治	美濃	大森	遊子	
74	坂井	文右衛門	美濃	古一場	共重	
75	高井	角治郎	美濃	小倉	花蝶	
76	渡辺	響造	美濃	伊吹	遊斎	
77	三輪	貞吉郎	美濃	山田	貞庸	
78	高井	忠兵衛	美濃	小倉	免友	
79	国井	斎一	美濃	一日市場	知才	
80	小川	源三郎	美濃	世保	輝月	
81	亀山	政輔	美濃	小屋名	匡賀	
82	森	保三郎	美濃	野白	尚貞	
83	水上	東璞	美濃	濃府	秀成	
84	水上	東	伊勢	四日市産	日明	妻女
85	田中	長太郎	美濃	世保	余慶	
86	西	源蔵	美濃	濃府	橘井館	
87	片桐	半左衛門	美濃	白金	貴重	
88	武藤	庄左衛門	美濃	世保	麒麟	
89	小川	吉五郎	美濃	世保	乙菊	舎弟
90	高田	多賀	美濃	濃府産	友尾	女
91	成瀬	理左衛門	美濃	長屋	正供	
92	成瀬	恒之輔	美濃	長屋	正述	息男
93	河合	寛四郎	美濃	今川	俊親	
94	篠田	五郎右衛門	美濃	側嶋	政道	
95	町野	猶助	美濃	門屋	俣風	俳人
96	宮部	庄右衛門	美濃	野中	安尊	
97	小澤	弥平治	美濃	古市場	鶴兆	俳人
98	玉田	寅之助	美濃	大洞	竹林	
99	梅田	和祐	美濃	伊自良	延年	
100	玉田	伝右衛門	美濃	大洞	得玉	
101	玉田	富治郎	美濃	大洞	玉継	息男
102	梅田	助太郎	美濃	平井	梅香	
103	土屋	兵右衛門	美濃	十九条	秘章	
104	山田	佐兵衛	美濃	白金	登道	
105	高井	巳之助	美濃	小倉	和立	
106	吉田	友十郎	美濃	十四条	俳人	
107	下条	啓作	美濃	千匹	重正	
108	羽根田	万蔵	美濃	濃府	友勝	
109	高井	棚吉	美濃	小倉	良二	
110	高井	龍平	美濃	小倉	子篤	舎弟
111	安田	春野	美濃	山田	貞婦	婦人

教育史フォーラム 第13号

112	岩井	定治	美濃	大洞	吉春	
113	伏屋	宅治郎	美濃	伏屋	重治	
114	横山	孫三郎	美濃	鍛冶産	親宗	
115	足立	織衛	美濃	小瀬	矩林	
116	棚橋	藤十郎	美濃	城田寺	守道	
117	西村	国治郎	美濃	白金	道斎	
118	中村	栄輔	美濃	千疋	判泰	
119	関谷	郡蔵	美濃	本田	活庵	
120	真野	小吉	美濃	関	盛重	
121	山田	久左衛門	美濃	白金	房富	
122	高井	団四郎	美濃	四日市	厚德	
123	片桐	浅右衛門	美濃	保明	虎卯	
124	土屋	碓右衛門	美濃	十九条	親民	
125	水谷	儀右衛門	美濃	河渡駅	光義	
126	広江	伊造	美濃	牛数	武利	
127	坂	熊助	美濃	芝北方	久延	
128	坪内	清四郎	美濃	小梯	包道	
129	清水	真右衛門	美濃	賀野	義知	
130	大野	類治	美濃	賀野	知里	
131	五井	計太郎	美濃	牧田	直行	
132	吉田	佐輔	美濃	芝北方	玉圓齋 子鳳	
133	久富	太吉	美濃	八井	文貞	

134	堀口	孫作	美濃	上ノ保	包治	
135	斎藤	平三郎	美濃	小梯	守孝	
136	太熊	藤左衛門	美濃	上ノ保	守利	
137	福田	伊呂久	美濃	真桑	重奥	
138	龜山	次右衛門	美濃	小屋名	董有	
139	北川	億助	美濃	前野	以止	
140	小川	佐輔	美濃	芝北方	正昌	
141	上野	助右衛門	美濃	藤倉	常義	
142	神谷	建三	美濃	彦坂	定彝	
143	松尾	半左衛門	美濃	見延	安奥	
144	鷺見	延昌	美濃	下奈良	祐治	
145	堀	市左衛門	美濃	大洞	正竹	
146	堀	古文	美濃	大洞	千絲	妻女
147	堀	正之丞	美濃	大洞	正氏	息男
148	加藤	七右衛門	美濃	大洞	祐真	
149	加藤	縫	美濃	大洞	女真	妻女
150	加藤	浅太郎	美濃	大洞	祐昌	息男
151	小森	寿平	美濃	佐賀	守永	
152	守永	千代	美濃	鶴産	寿	妻女
153	遠山	新右衛門	美濃	濃府	三亀	
154	棚橋	正造	美濃	伊自良	道甫	
155	林	重平	美濃	十八条	義光	
156	小塩	正左衛門	美濃	濃府	文雷	

註

- 1 拙稿『三野人物考 和合編』一順序なき人名録の「謎」と「真相」『教育史フォーラム』第12号、2017。
- 2 「本姓菅原、孝学道人、また清水堂主人と称す。京都堀川頭水火天神社の人、孝親道を開き、諸国を巡回して、孝連を建て、孝道を奨励す。天保の初、岐阜に来り、美濃国内を巡回して孝学を講説す」（伊藤信『濃飛文教史』岐阜・博文堂書店、1937、586頁；同じく、それを踏まえた、岐阜市編『岐阜市史』通史編・近世、岐阜・岐阜市、1981、574頁）；「孝学道人菅原友山は京都堀川頭、寺の内上る所、水火天神社境内に孝学講究所を天保八年春開設した」（林正章「孝学堂の開祖とその主張」『文献』第2号、1959）；「孝学所は、菅原友山が天保初年頃に京都（堀川頭）の「水火天神」という神社内に設けたらしい」（小泉吉永「解題」『江戸時代女性文庫』7、大空社、1994、9頁）。
- 3 本稿中の図は、【図Ⅲ】と【図Ⅳ】以外、すべて私蔵の版本による。
- 4 前掲『濃飛文教史』587頁。
- 5 前掲『岐阜市史』576頁。
- 6 前掲「孝学堂の開祖とその主張」16頁。
- 7 もじる特徴は、『孝養門』（1832年序）と『三野人物考 和合編』（1835年序）にはまだ現れていないが、本書『孝連人物考』以降、それが著しく登場する。
- 8 先行研究において、河瀬友山が「諸国を巡回」したとの記述（前掲『濃飛文教史』586頁；前掲『岐阜県史』574頁）が見られるが、ほかに史料の根拠がないため、おそらくこの『孝連人物考』【序1】の土師友人に関する記述を、友山に当てて誤解したのであろう。
- 9 水火天満宮所蔵の由緒書『当社水火天満天神御鎮座監臨』に、「養老之大孝子從五位上美濃頭土師友人より五十八代之後胤、濃州大野郡寺内村の住人、河瀬東八郎菅原友景」とある。
- 10 藤川正数「養老伝説」小考—神仙譚から孝感説話へ『岐阜女子大学国文学会誌』第17集、1988。
- 11 『孝連人物考』において、この図は特に「御札」と呼ばれていないが、『孝養門』では、同じような図の隣に「孝の御札、家内ニ張置、信心堅固、恩徳広太、諸願成就、無上靈宝」とある（前掲『三野人物考 和合編』94頁、図Ⅱを参照）。
- 12 国学院大学図書館「河野省三記念文庫」所蔵（請求番号2361、2362）。この施印を「孝養ヶ条」に当てるものとするのは、その末尾にある、「孝養のヶ条、日毎々に為読覧人々ハ、悪事災難を遁、家内和合・立身出世・永栄安樂に基き、生涯危きことなし」（【図Ⅲ】）と、「孝養の箇条、日々に為拝読面々ハ、禍ひ

ファンステーンパール：『孝連人物考 和合編』

- 退き、福ひ来り、為所の願ひ自ら成就して、永く安楽に至るべし」(【図IV】)との記述である。
- ¹³ 孝連関係のいわば、専門用語の引用数は、「孝連」2回(62、75)、「孝学」8回(10、49、56、57、78、94、132、151)、「孝名」3回(74、120、122)である。
- ¹⁴ この女性の作者番号は、12、38、51、62、84、90、146、149、152である。
- ¹⁵ この女性とは、駒田岸女(38)と神谷姓女(62)である。
- ¹⁶ この13所の住居(出身人数)は、大洞(14人)、白金(9人)、小瀬(8人)、芝北方(8人)、濃府(8人)、小倉(6人)、千疋(5人)、世保(4人)、加野(3人)、北方(3人)、小屋名(3人)、城田寺(3人)、山田(3人)。
- ¹⁷ この重複している唯一の人物は河田熊碩(40)である。岐阜市城田寺の蘭方医であったようである(青木一郎「濃州蘭学史」『日本医史学雑誌』第23巻2号、1977、24頁)。
- ¹⁸ 前掲『「三野人物考 和合編」』。この論考において、『孝養門』が施印という私家版として流布した論拠として、『孝養門』の巻末に友山が自分を「施主」と明記している(94頁)と書いたが、この「施主」は「願主」の誤読であったことをここで訂正する。とはいえ、宮城県立図書館「寿庵文庫」所蔵の『孝養門』の巻末には、「京都仙台東屋舗内 施主黒瀬氏」があるように、『孝養門』が施印として流布していた証拠はほかにもあるので、仮説自体を訂正する必要はない。
- ¹⁹ 長谷部八朗「叙文」長谷部八朗編『「講」研究の可能性』第I編(慶友社、2013)11頁。
- ²⁰ 「濃府」というのは、『角川日本地名大辞典』にも出ていないほど珍しい名称であるが、『美濃盛衰録』(下巻、「井口旧譜」)には「岐阜ハ濃府ト云伝フ」との記述がある(『美濃盛衰録』岐阜県郷土資料研究協議会、1983、291頁)。また、河瀬友山は「清水堂」と号した由来に関する記述はないが、前掲『当社水火天満天神御鎮座監觴』において、河瀬家の先祖である土師友人は「美濃国本巢郡多度出の麓、清水の里の住人、土師金人の男」であったとあるので、おそらくそれに因んだのであろう。
- ²¹ 安政二年(1855)に刊行された『いろは歌孝行鏡』(一枚摺、私蔵)に「濃州郡上八幡御城下 孝聞中施板」とあり、刊年不明な『大聴利徳の最上』(一枚摺、私蔵)に「尾州熱田宮駅 孝聞中施板」とある。

【附記】

本稿は2015年度グラフィック文化に関する学術研究助成「日本近世の「施印」に関する基礎研究—国内・国外調査と事例研究」(公益財団法人DNP文化振興財団)と、2017年度科学研究費補助金「近世教育メディア史における「無料」の価値—「施印」に着目して」(若手研究B、17K12981)による成果の一部である。また、本稿の執筆にあたって、史料の閲覧と撮影を快くご許可くださった孝学家の方々に礼を申し上げます。